

2005-06 年度の年間カリキュラム報告

ーアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの中上級日本語集中教育ー

松本 隆

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC: Inter-University Center for Japanese Language Studies）は、北米の大学生・大学院生などに対して、中上級レベルの日本語を集中的に指導する教育機関である。日本社会に違和感なく受け入れられる高度な日本語を教育し、日本研究の専門家および日本関係の実務家の育成に貢献している。

当センターでは、40 週間におよぶ年間コースと、6 週間の夏期コースの、2 種類のプログラムを実施している。2005-06 年度の年間コースの学生は 31 名、それに続く 2006 年 6 月から 8 月の夏期コース学生数は 34 名（個人指導を除く）であった。本報告では前者 40 週の「レギュラーコース」における指導内容について、反省や要改善点にも随時ふれながら紹介していく。なお反省点は、学生への質問紙調査、ならびに第三者による視察調査の報告（本報告 7 節「おわりに」参照）などに基づくものである。

2 レギュラーコースの概観（40-Week Intensive Program）

2005 年 9 月 5 日から翌 2006 年 6 月 9 日までの 40 週間にわたってレギュラーコースを実施した。本コースは 4 つの学期に分かれ、9 月から 10 月末の秋休みまでを第 1 学期、11 月から 12 月の冬休みまでを第 2 学期、翌新年 1 月から 3 月の春休みまでを第 3 学期、そして春休み明け以降コース終了までを第 4 学期と称する。1～2 学期をまとめて前期と呼び、3～4 学期を後期と呼んでいる（表 1～4 参照）。

表 1 前期午前の内容

週	2005年 午前	月	火	水	木	金
1	9/5-9/9	入学オリエンテーション、写真撮影	筆記試験	所長個人面談	所長個人面談	SKIP&CALL オリエンテーション
2	9/12-9/16	文法基礎 お試しクラス				
3	9/19-9/23	敬老の日				秋分の日
4	9/26-9/30		文法復習 A S J or J G			
5	10/3-10/7					横浜の日 秋の校外学習
6	10/10-10/14	体育の日				
7	10/17-10/21		待遇表現			
8	10/24-10/28					
9	10/31-11/4	秋休み 10月29日(土)～11月6日(日)				
10	11/7-11/11		接続表現			
11	11/14-11/18					
12	11/21-11/25			勤労感謝の日		
13	11/28-12/2		統合日本語 文章編		統合日本語 会話編	
14	12/5-12/9	Integrated Japanese Advanced Course				
15	12/12-12/16					
16	12/19-12/23				個人面談 4 前期評価	天皇誕生日
17	12/26-12/30	冬休み 12月23日(金)～1月15日(日)				
18	1/2-1/6					
19	1/9-1/13					

表2 前期午後の内容

週	2005年午後	月	火	水	木	金
1	9/5-9/9	発話試験 所長個人面談	所長個人面談	所長個人面談	所長個人面談	個人面談1 入学祝賀会
2	9/12-9/16	漢字 or 発音 オリエンテーション1	翌日午前からの 文法復習の説明		漢字 or 発音 オリエンテーション2	個人面談2 診断的評価
3	9/19-9/23	敬老の日				秋分の日
4	9/26-9/30		(書道オリテ)		総合運用 I	講演会 久野明子
5	10/3-10/7	総合運用 I				横浜の日 秋の校外学習
6	10/10-10/14	体育の日	(書道開始)		総合運用 I	
7	10/17-10/21					
8	10/24-10/28					個人面談3 1学期評価
9	10/31-11/4	秋休み 10月29日(土)～11月6日(日)				
10	11/7-11/11					
11	11/14-11/18					
12	11/21-11/25	講演会 小玉亮子	総合運用 II	勤労感謝の日	総合運用 II	
13	11/28-12/2					(3学期オリテ)
14	12/5-12/9					
15	12/12-12/16					
16	12/19-12/23				忘年会	天皇誕生日
17	12/26-12/30	冬休み 12月23日(金)～1月15日(日)				
18	1/2-1/6					
19	1/9-1/13					

表3 後期午前の内容

週	2006年 午前	月	火	水	木	金
20	1/16 - 1/20					
21	1/23 - 1/27					
22	1/30 - 2/3	選 択 A	統 合 日 本 語 II		選 択 B	選 択 A
23	2/6 - 2/10	文化人類学			スピーキング	(4学期オリエ)
24	2/13 - 2/17	政治・経済 美術史	Integrated Japanese Advanced Course II		リーディング ビジネス日本語	専門分野別 校外学習
25	2/20 - 2/24	文学 法律				
26	2/27 - 3/3	歴史				
27	3/6 - 3/10		個人面談5 中間の評価			
28	3/13 - 3/17	春休み 3/11(土)～3/26(日)				
29	3/20 - 3/24					
30	3/27 - 3/31					東京の日 春の校外学習
31	4/3 - 4/7	選 択 A	上 級 日 本 語		選 択 B	選 択 A
32	4/10 - 4/14		(卒業発表オリ テ)		スピーキング リーディング ライティング	
33	4/17 - 4/21				リスニング 現代小説	
34	4/24 - 4/28					
35	5/1 - 5/5	休み：ゴールデンウィーク 4/29(土)～5/7(日)				
36	5/8 - 5/12	選 択 A	上 級 日 本 語		選 択 B	選 択 A
37	5/15 - 5/19					
38	5/22 - 5/26					
39	5/29 - 6/2	筆記試験 am 発話試験 pm	発表準備：授業はないが各学生は自主的に発表の準備を進める			
40	6/5 - 6/9	発表予行演習 希望者対象	卒業発表会 クイーンズスクエア			個人面談6 最後の評価

表4 後期午後の内容

週	2006年 午後	月	火	水	木	金	
20	1/16 - 1/20						
21	1/23 - 1/27	総合運用 III					
22	1/30 - 2/3						
23	2/6 - 2/10						
24	2/13 - 2/17		現代史 大衆文化			現代史 大衆文化	専門分野別 校外学習
25	2/20 - 2/24		ビジネス社会			ビジネス社会	
26	2/27 - 3/3						
27	3/6 - 3/10	プロジェクトワーク			プロジェクトワーク		
28	3/13 - 3/17	春休み 3/12(土)～3/27(日)					
29	3/20 - 3/24	春休み 3/12(土)～3/27(日)					
30	3/27 - 3/31	プロジェクトワーク				東京の日 秋の校外学習	
31	4/3 - 4/7						
32	4/10 - 4/14						
33	4/17 - 4/21		講演会 金田一秀穂				
34	4/24 - 4/28						
35	5/1 - 5/5	休み：ゴールデンウィーク 4/29(土)～5/7(日)					
36	5/8 - 5/12	プロジェクト					
37	5/15 - 5/19						
38	5/22 - 5/26						
39	5/29 - 6/2		筆記試験 am 発話試験 pm	発表練習予備日 要予約		発表練習予備日 担当教員に事前予約し指導を受ける	
40	6/5 - 6/9	発表予行演習 発表会場下見	卒業発表会 クイーンズスクエア			卒業式 パーティー	

午前と午後の授業の特徴を端的に色分けするなら、午前は日本語の構造や知識に関する言語形式の側面を重視し、午後は聴読解や発話など言語運用の技能を伸ばす、という力点の置き方に差異がある。午前は「文法復習」「待遇表現」「接続表現」「統合日本語」「上級日本語」を必修科目とし、後期の午後には「選択 A」「選択 B」という選択必修科目を「統合日本語Ⅱ」「上級日本語」と並行して実施した。午後は「総合運用」が1学期から3学期まで続き、4学期の午後は「プロジェクトワーク」を行った。

授業は月曜から金曜まで毎日、午前は9時00分から10時00分までコンピュータを使用した学習、10時00分から50分授業を2コマ行い、午後は1時30分から3時までの90分授業のあと、3時10分から5時00分まではコンピュータを使用した学習時間とした。なお水曜日の授業は午前2コマのみで、午後はコンピュータ学習にあてた。

3 午前の必修科目 (Morning Session)

午前の必修科目では主として言語知識・言語項目に焦点をあてる。初級文法の復習や基本的な会話練習から開始し、待遇表現と接続表現を強固なものとしたのち、上級の日本語と呼ぶにふさわしい表現の拡充を図る。

3-1 文法復習 (Japanese Grammar Review)

入学直後の1学期午前にはまず、中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい文法事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力を向上させる。教科書として、当センター編集発行の市販教材 *An Introduction to Advanced Spoken Japanese* (略称 ASJ) あるいは当センターで作成した内部教材 *Japanese Grammar* (略称 JG) のどちらか一方を、学生の日本語習熟度に応じて使い分けた。

印刷教材とあわせ、音声によって文法事項のドリル練習ができる文法復習用ソフトウェア「文法復習ドリル Ver.2.6」およびテキストの会話部分

の練習ができるソフトウェア「ASJ会話 Ver.1.1」も使用した。

2005-06 年度この科目は、1 学期の第 2 週から第 6 週までテストも含めて合計 21 日間行った。

3-2 待遇表現 (Formal Expressions for Japanese Interaction)

この科目では、日本人との人間関係を円滑に進めるための諸方策つまり敬語とその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動が適切にできるようにする。教材として、当センターが作成した『待遇表現』（ジャパントイムズ社刊）およびソフトウェア「待遇表現 Ver.2.1」を使用した。

2005-06 年度は、1 学期の第 7～8 週に週 5 日の計 10 日間、および第 4 学期の第 30～31 週に週 2 日の計 4 日間、合わせて 14 日間にわたって行った。

3-3 接続表現 (Conjunctive Expressions in Japanese)

接続詞を中心に、文の接続方法を学習し、段落や文章を組み立てる基礎力を身につける。2005-06 年度は、2 学期の第 10～11 週に 8 日間と、4 学期の第 32 週に 2 日間、合計 10 日間にわたって行った。

3-4 統合日本語 (IJ: Integrated Japanese Advanced Course)

上下 2 巻のテキストとその録音盤 (Audio CD 版と MP3 版の両形式あり) からなる教材セット『統合日本語 *Integrated Japanese Advanced Course*』が本年度ついに完成した (ただいま市販化に向けて準備中)。当センターが中上級レベルの日本語集中指導において長年培ってきた成果が具体的な形で結実したことになる。

この「統合日本語」略称 IJ は、昨年度まで AJ (Advanced Japanese) と称していた科目である。教材セット完成を機に、内容をより適切に表す名称へと変更した。

「統合日本語」は専門別日本語学習が始められる段階まで日本語力を総合的に高める教材である。各課は同一トピックをめぐる「文章編」と「会話編」からなり、「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・表現・語彙を学び、「会話編」では口頭でのやり取りを学習する。

2005-06年度は、2学期の第11週から第16週までの週5日計24日間で「統合日本語」上巻（第1～3課）を扱い、3学期の第20週から第27週の週2日計15日間で「統合日本語」下巻（第4～5課）を扱った。月曜から金曜まで週5日間指導した2学期は、月火水を「文章編」にあて、木金を「会話編」にあて、書き言葉と話し言葉を別のクラス編成とした。これにより例えば、読むことは得意だが話すのは苦手なタイプの学生や、その逆に流暢に話すわりには読みが弱い学生など、それぞれが必要とする技能に応じて細かく対応しながら総合力を伸ばすことが可能となった。

3-5 上級日本語 (AJ: Advanced Japanese)

2005-06年度4学期の授業期間（第30～38週）の週2日火水を「上級日本語」と称し、日本語力のさらなる拡充を目指した。標準的なクラスでの指導内容は、上述のごとく第30～31週の計4日間で「待遇表現」の補足と整理を行い、第32週の2日間で「接続表現」を復習し、第33週以降「上級日本語」へと進んだ。10日間にわたる「上級日本語」では、それまで学生にとって馴染みの薄い「対談・インタビュー」「評論」「論説」などを素材に取り上げ、より幅広い表現に触れさせる工夫をした。

4 午後の必修科目 (Afternoon Session 総合運用Ⅰ～Ⅲ)

午後の必修科目「総合運用」は主として、読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、文字通り総合的な日本語運用力の向上を目指している。身近で日常的な話題から始まり（総合運用Ⅰ）、より広範な社会的話題へと発展し（総合運用Ⅱ）、さらに学習者の興味や関心に応じた話題の学習

(総合運用Ⅲ) へと進んだ。

4-1 総合運用Ⅰ (Applied Japanese Skills Ⅰ)

既習の文法事項などを総合的に活用する機会を提供しつつ運用力を高める訓練を積んだ。「経験談」「新聞入門」「ニュース入門」「新聞ニュース」というユニットからなり、自然な話し方に慣れるとともに、日本事情や時事的話題に関する語彙・表現の習得をねらいとする。2005-06年度は、1学期の第3週から第8週まで合計18日間行った。

4-2 総合運用Ⅱ (Applied Japanese Skills Ⅱ)

一般的な社会問題をめぐる生教材つまり読物と関連ビデオ(たとえば報道番組)などを読解・聴解し、話し合いを重ねることによって、類似した一般的な話題についても日本人と話し合える能力を獲得させる。この総合運用Ⅱでは話題シラバスに基づくモジュール型教材群を採用し、トピックとして「ものづくり」「文化の発信」「外国人と国籍」「地球環境」「働く女性」「教育制度」「差別と人権」を扱った。2005-06年度は、2学期の第10週から第16週まで25日間行った。

4-3 総合運用Ⅲ (Applied Japanese Skills Ⅲ)

「現代史」「大衆文化」「ビジネス・社会」の3コース(下記参照)から学生は各自の専門や興味に応じて1コースを選択した。各コースとも、読物を理解したりビデオを視聴したり、さらにその話題について討論をするなどの諸活動が盛り込まれている。2005-06年度は、3学期の第20週から第26週まで合計27日間行った。

4-3-1 現代史 (Modern History)

ムービーフィルムが残されている1900年前後からの日本の歴史を、特に戦後を中心にビデオと読み物で概観した。「戦前の日本1900-45」「敗戦

と復興 1945-55」「高度成長 1955-70」「現代の日本 1970-95」などの話題を取り上げた。

4-3-2 大衆文化 (Popular Culture)

広い意味での日本の“大衆文化”に関して日本人と話せるようになることを目標とした。「CM」「映画」「漫画」「文化政策」「伝統文化・古典芸能」などの話題を取り上げた。

4-3-3 ビジネス・社会 (Business/Modern Society)

バブル経済の前後における企業や政府、さらに社会や人々の暮らしの変化を、戦後史にも触れながら追っていった。「バブルの前と後」「創業者」「通産省と大蔵省」「平成不況」「雇用制度」「系列」「マネーゲーム」などの話題を取り上げた。

5 後期の選択必修科目 (Second Half of Program, Elective Courses)

様々な分野別のコースを開設し、学生は各自の専門や、必要とする技能に応じてコースを選択した。選択A（週2回の必修選択）、選択B（週1回の必修選択）、選択C（週1回の自由選択）の3種類を開設した。

選択Aでは、専門に関する書物を読んだりビデオを視聴することによって、それぞれの専門に必要な語彙や表現に注目し、同時に各専門の内容にも踏み込んだ。選択Bでは、必要とする日本語技能の学習や弱点の補強を行った。選択Cは、書家やビジネスマンなど外部の専門家を講師として招き、日本語教師では対応しきれない内容を扱う、希望者対象の自由選択コースである。

5-1 選択A (Elective Course A)

各学生は「文化人類学」「政治経済」「美術史」「文学」「歴史」「法律」の中か

ら自己の専門領域に関連するコースを1つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する能力の育成に取り組んだ。ただし各コースの履修学生すべてが当該分野を専攻しているわけではなく背景知識にバラツキがあるため、教材の準備や教室での指導に際して、そうしたバラツキの対処に苦慮する場合もあった。

2005-06年度は、3学期の第20週から第27週までと、4学期の第30週から第38週まで、つまり後期全体を通して開講した。基本的に学生は3～4学期の後期全体を通して同一のコースを履修した。

5-1-1 文化人類学 (Cultural Anthropology)

文化人類学や社会学などのテキスト、また一般の雑誌記事、さらに実際の研究・調査報告などを素材として、現代日本社会について考えた。3学期前半は「近代家族」や「国民国家論」など、各学生が共通に知っておくべき中核的な話題を扱ったのち、3学期の半ば以降は各学生の専門や興味に応じて様々なテーマを扱いながら考察を深めた。

5-1-2 政治経済 (Politics/Economics)

“今の日本”を知り、それについて意見を言えるようにすることを目標とした。まず3学期の前半に日本の政治と経済に関する基礎知識を導入したのち、細分化した話題へと移行した。コース中盤以降は、教師が準備した素材の学習指導と並行して、毎回担当となった学生が教師役となり話題を提供し討論を進行する活動も並行して実施した。

5-1-3 美術史 (Art History)

明治時代に形成された「日本美術史」という概念をまずおさえた上で、各学生の研究テーマに関する論文を学生自身が選び、それをもとに話し合いを行った。美術という狭い分野に限らず、視覚・聴覚芸術なども包括的に扱った。

5-1-4 文学 (Modern Literature)

主に現代の短編小説や評論などの文学作品を取り上げ、理解・鑑賞したのち話し合いを行った。おおむね2～3回で1作品を読んだ。文学を専門としない履修者にも配慮し、文学作品の理解・鑑賞・討論という授業形態にとらわれることなく、例えば村上春樹のファンサイトに投稿するなどの幅広い活動も柔軟に盛り込んだ。

5-1-5 歴史 (History)

古代から近現代に至る日本史上の諸トピックを取り上げ、日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積み重ねた。通史の教材としては大江一道著『日本』朝日新聞社刊を採択し、個別のテーマに関しては専門的な論文を扱うなどした。

5-1-6 法律 (Law)

日本の法律全般、特に憲法、民法、刑法、会社法などについて、その基本的内容に関し判例も扱いながら指導した。本年度は、近年の司法制度改革に合わせて、文語表現の学習負担を軽減する一方、裁判員制度に関するドラマなど映像素材を取り入れ、また裁判を傍聴するなどの体験学習を強化した。

5-2 選択B (Elective Course B)

選択Bでは日本語力の増強あるいは周辺分野の学習を行った。2005-06年度は、3学期(第20～27週)に「スピーキングⅠ」「リーディングⅠ」「ビジネス日本語」の3種を開講し、4学期(第30～38週)には「スピーキングⅡ」「リーディングⅡ」「リスニング」「ライティング」「現代小説」の5種を開講した。

5-2-1 スピーキング (Speaking)

発話力伸張の訓練を行った。具体的には、大学院での演習を場面として想定し、発表・司会・討論の各技能を高めることを目標とした。スピーチやディスカッションの最中に目立った、文法・語彙・音声などの弱点も適宜補強しながら表現の幅を拡張した。

5-2-2 リーディング (Reading)

一般的な読み物ならある程度読めるが、抽象的で複雑な文章はまだ弱いという学生を主な対象とした。いわゆる「日本人論」に関する評論文を素材として、論旨の展開を中心に精読したのち内容をめぐる議論をした。

5-2-3 リスニング (Listening)

テレビ番組たとえば NHK のニュースや解説番組などを素材にして、聞き取りの訓練を積み重ねた。リスニング素材の選択に当たっては学生の興味や関心にも配慮し、授業では集中して聞き取る形態を採用した。

5-2-4 ライティング (Writing)

随筆から小論文まで、目的に合った幅広い文章表現力の習得を目的とした。毎週、宿題として各種の文章を書き、授業ではそれを全員で検討・批判しあい、日本語らしい文章の書き方と推敲の技術について考察した。

5-2-5 ビジネス日本語 (Business Japanese)

学生から社会人（会社人）に移行する過程で遭遇する場面を想定し、役割練習を積み重ねながら発話力の伸張を図った。具体的には「就職の面接」を受け、入社後「自己紹介」「他社訪問」「名刺交換」「電話の取り次ぎ」「苦情処理」を行うなどの場面練習をした。またビジネス文書の書き方を取り上げたり説得の技法なども適宜扱った。

5-2-6 現代小説 (Contemporary Novel)

現在よく読まれている作家の短編小説を毎週1作品ずつ取り上げた。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促した。教材として、村上春樹、阿刀田高、向田邦子、筒井康隆、川上弘美、大庭みな子、江戸川乱歩、村上龍、綿谷りさ、などの短編を扱った。

5-2-7 日本文化論 (Culturology)

青木保著『日本文化論の変容』をテキストとして、戦後、日本人の日本文化観およびアイデンティティに対する認識が、どのように変化したかを考えた。授業では、各学生が自分の担当箇所のレジュメを準備し、発表・議論する形式を採った。

5-3 選択C (Elective Course C)

自由選択コースとして「文語文法」「書道」「古筆」「ビジネス」の4種を開設した。「書道」のみ年間を通して実技指導を行い、ほかの3コースは後期から開始し講義形式で授業を進めた。3学期は放課後に、4学期は昼の時間帯を利用して、各分野の外部専門家が週1回指導した。

昨年度までは「文語文法」だけを「選択C」と称し、ほかは「課外授業」と呼んでいた。本年度は呼称の煩雑さを避けるため、希望者対象の自由選択コースを「選択C」と総称することにした。

5-3-1 文語文法 (Classical Japanese Grammar)

文語文法の基礎から指導し、古典の読解へと進んだ。3学期の授業は毎週月曜15時15分から16時45分までであったが、4学期は同13時00分から14時30分までに時間を変更した(両学期とも90分授業)。指導には、国際基督教大学講師の金山泰子が当たった。

5-3-2 書道 (Calligraphy)

書道の心得や筆の運び方などの基本から開始し、最終的には印も自作し落款付きの作品を仕上げるまでに至り、掛け軸に表装した作品は卒業発表会場に展示した。1～3学期は毎週月曜 15 時 15 分から 16 時 45 分に開講し、4 学期は毎週火曜 13 時 00 分から 15 時 00 分へと開講日時を変更した。講師は書家の小林絃子が担当した。

5-3-3 古筆 (Classical Handwriting)

手書きの古典文献を理解するのに欠かせない古筆の読解練習を段階的に進めた。指導は上記の書道と同じ書家の小林絃子が担当し、書道終了後の 60 分間ひと月に 3～4 回、3 学期は月曜 16 時 45 分から 17 時 45 分まで、4 学期は火曜 15 時 00 分から 16 時 00 分まで指導した。

5-3-4 ビジネス (Business)

金融や実業に関する実践的な知識も紹介しながら、ビジネス界を広い視点から捉えた。3 学期の授業時間は毎週木曜 15 時 15 分から 16 時 15 分まで、4 学期は同 12 時 15 分から 13 時 15 分までであった。講師は浜銀総合研究所顧問の湧井敏雄が担当した。

5-4 プロジェクトワークと卒業発表 (Project Work and Final Presentation)

プロジェクトワークでは、各学生が自己の専門や興味のある分野に関する主題を決め、学生主導で調査・研究を進めた。具体的には、関連文献の読解、ネット検索、聞き取り調査、質問紙調査などの活動を通し、それまでに学んだ知識・技能を実際の場面で応用し、さらなる能力の伸長を図った。

2005-06 年度は、第 27 週および第 30 週から第 38 週までを、この活動の正規の授業期間とし、第 39 週を予備週にあてた。予備の授業日まで活用した学生は合計 10 回の指導を受けることになった。

卒業発表会は、10 か月間にわたる学習を締めくくる催しである。各学

生は、来賓と全教職員学生の前で、質疑応答を含め1人15分の持ち時間内で、やや改まった形式で発表をした。発表内容はプロジェクトワークの調査研究にもとづくもので、各学生の発表題目は下記の通りである（学生名簿順）。なお当センターのホームページでは2005-06年度も含め過去の卒業発表会の要旨を公開してしているので興味のある方はぜひ参照されたい。URLはhttp://www.iucjapan.org/presentations_j.htmlである。

プロジェクトワークは学生が主体的にテーマを掘り下げていくという性格上、その話題に比較的詳しい教員との一対一の指導形態を採っている。各学生は週に1回、卒業発表会に向けて担当教員との濃密な時間を持つ反面、この枠内では卒業発表と直接関係のない学習活動がしにくいという制約も生じた。次年度以降は、個別対応の利点を生かし、より柔軟な指導体勢で臨む予定である。

卒業発表の題目

「身体を洗ってもアカが出なかった」赤軍と人間性の政治
西田の哲学における倫理学
アメリカ占領に対する日本国民の態度
第三セクターは誰のものか
谷崎潤一郎と映画：純文学の映画化について
源氏物語絵巻
外国人力士の日本語学習法
日本に於ける陰陽道
金山神社とその社会的意味の変遷
「東海道四谷怪談」における幽霊の役割
大正日本と中流階級の意識
憲法改正
女性の海外流出とその日本に対する意義
株式会社は一体誰のものか

ライブドア事件：ルールからはずれたゲーム
弁財天：曼陀羅と巡礼
耐震偽装問題
ひきこもりにおける日米文化背景について
横浜の大空襲
日本の音楽雑誌写真：芸術と商業の異種交配
JETプログラム終了後の進路
著作権の近代化
「特別ニーズ」の子どもたち
謎の国一渤海
佐多稲子のプロレタリア文学作品における女性像
日本の広告に見る英語
宗教マンガ：個人化・商品化しつつある現代日本の宗教
アメリカにおける日本人学校・補習授業校
山本昇雲と近代の視角化
日本のクリスマス：本物か偽物か
ライブドア対フジテレビ、敵対的買収に関する日本の法整備

6 通年で実施した学習指導と行事など

40週にわたるレギュラーコースの期間中には、授業のほかにも日本語の習得を促す数多くの機会が織りこまれている。この節では、そうした授業以外の学習機会について紹介する。

6-1 アドバイザー制と評価 (Advisory System and Evaluation)

学生1人に専任教員1名がアドバイザーとしてつき、年間を通して学习上および生活上の助言・指導をした。

定期的な個人面談として、入学直後に2回そして各学期末に4回、合計

6回の面談を年間の日程に組み込んでいる。9月初めの面談は診断的な評価であり、入学直後に実施した筆記試験（テープによる聴解試験を含む）と発話試験の結果を踏まえ40週にわたる学習の指針を示した。

1～3学期末の個人面談は形成的な評価である。学生が履修したクラスを担当する教員の評価および学習上の問題点をまとめて、学生にフィードバックする機会となる。

各クラスでは、試験または試験に代わる小規模な発表、日々の小テストなどを行うことによって、学生の到達度・伸び具合を把握した。これらのテスト等の結果や、授業を担当する教員が日頃の観察から得た情報は、教職員会議および学生個人別記録簿などを通じてアドバイザーのもとに集約され、その後の指導に還元した。

4学期末つまり年度末の個人面談は総括的な評価となる。年間コース終了直前に、入学時と同様の筆記試験・発話試験を実施し学習成果の客観的把握に役立てた。

アドバイザーと学生の関係は、テスト結果を上から下へ言い渡すものではなく、客観的な判断材料をもとに対話を通じて課題を明確にしていく学習プロセスの一部として機能している。特に本年度は学生数が31名と少なめであったため、専任教員1名あたりの受け持ち学生は3～4名にとどまり、例年以上に懇切丁寧な対応が可能となった。

アドバイザーは、担当する学生に日々注意を向け、必要があれば随時相談に応じた。また、漢字プログラム（次節参照）の進捗状況を確認・促進する目的で、週1回程度、漢字の読み方・発音指導などを行った。

6-2 漢字プログラム（スキップSKIP: Special Kanji Intensive Program）

常用漢字習得のためのプログラムである。自学用教材として当センター編集発行の市販教材 *Kanji in Context*（ジャパンタイムズ社刊）を用いた。漢字を単独で取り上げるのではなく、熟語、例文と共に学習する。学生は、ワークブックおよびコンピュータで独習し、翌朝クイズを受け、教材助手

が採点するという形で、それぞれの進度で学習が継続できる。卒業時まで
に 1947 字（常用漢字＋2 字）が習得できる標準日程を組み、各教室には
「今週の漢字」を掲示し学習促進の一助とした。

この漢字習得プログラムの一環として、昨年度完成した漢字学習用新ソ
フトウェアを、本年度より本格運用した。本ソフトウェアは、書籍教材
Kanji in Context 内の漢字、語彙とその意味、例文、音声その他が入ってお
り、機種に依存せずに使用できるものである。

6-3 講演会・行事など

平日の授業時間帯に全学生を対象とする講演会と校外学習を各 3 回ずつ
開催した。また、選択必修コースの授業の一環としてクラスごとに見学会
を実施したり、毎週金曜の放課後に映画を上映するなど、様々な学習機会
を設けた。本年度の講演会と諸行事は下記の通りである。なお、ここには
本センターの主催行事と、相手方の団体・個人との共催・協賛行事を中心
に記載した。例年、学生が自主的に様々な催しを企画運営し、親睦を深め
豊かな学習環境を醸成しているが、そうした行事の記載は省いた。

6-3-1 講演会 (Lectures)

2005年

9月30日(金) 久野明子 (日米協会専務理事)

「最初の日本人女性留学生：大山捨松の生涯」

11月21日(月) 小玉亮子 (横浜市立大学国際総合科学部準教授)

「日本の家族：そのイメージと実際」

2006年

4月18日(火) 金田一秀穂 (杏林大学外国語学部教授)

「日本語と日本文化」

6-3-2 行事 (Other Educational Opportunities; field trips, site visits, outings, etc.)

2005年

- 9月 9日(金) 入学祝賀会、横浜国際協力センター 5階共用会議室にて
- 9月17日(土) 横浜かもんやま能鑑賞、横浜能楽堂にて、希望者のみ
- 9月30日(金) 映画「キッズ・リターン」鑑賞会、希望者のみ
これ以降毎週金曜に映画会を実施
- 10月 7日(金) 横浜の日（横浜市内における校外学習）
横浜開港資料館、神奈川県立歴史博物館、
横浜情報文化センター、新港パーク散策など
- 10月15日(土) 歌舞伎鑑賞①、国立劇場にて、希望者のみ
- 10月16日(日) 横浜本牧ロータリークラブ交流会、三溪園にて
- 10月22日(土) 落語鑑賞①、横浜野毛にぎわい座にて、希望者のみ
- 10月22日(土) 歌舞伎鑑賞②、国立劇場にて、希望者のみ
- 11月 4日(金) 横浜市立大学「浜大祭」参加、学生との交流会、希望者
- 12月 7日(水) 文楽鑑賞教室、国立劇場にて、希望者のみ
- 12月 9日(金) 就職活動説明会、希望者のみ、カール・パイザー
(情報テクノロジー株式会社セールスマネージャー)
- 12月17日(土) 落語鑑賞②、横浜野毛にぎわい座にて、希望者のみ
- 12月22日(木) 忘年会、横浜国際協力センター 5階共用会議室にて

2006年

- 1月14日(土) フェリス女学院大学と歴史認識の意見交換会、希望者
- 1月22日(日) 歌舞伎鑑賞③、国立劇場にて、希望者のみ
- 2月10日～11日(土～日) 下田市主催 異文化体験プログラム参加、希望者
- 2月17日(金) 専門分野別校外学習①（選択A全クラス実地見学）
神奈川近代文学館、横浜市立図書館、横浜地方裁判所
国会議事堂、日本銀行、東京都美術館など
- 2月21日(火) 大衆文化クラス講演「雅楽への招待」石川高 雅楽演奏家
- 2月25日(土) 落語鑑賞③、横浜野毛にぎわい座にて、希望者のみ
- 3月31日(金) 東京の日（東京都内におけるバス移動教室）

靖国神社（遊就館）、浜離宮公園、旧新橋駅舎、
東京国立博物館、国立科学博物館、交通博物館など

4月 3日(月) お花見、希望者のみ

4月20日(木) 横浜本牧ロータリークラブ交流会、総持寺にて、希望者

5月26日(金) 専門分野別校外学習②（選択Aの3クラス）

法律：東京地方検察庁と東京地方裁判所を訪問

人類学：巣鴨とげぬき地蔵尊と秋葉原を探索

政治経済：青山学院大学大学院生との討論会

6月 5日(月) 卒業発表の直前予行演習、希望者のみ

土岐哲 大阪大学教授による話し方と音声の指導

6月 6日～7日(火～水) 卒業発表会、みなとみらい21まちづくりプラザ
プレゼンテーションルームにて

6月 9日(金) 卒業式、卒業祝賀会、横浜国際協力センター共用会議室にて

7 おわりに：第三者からの提言を受けて

最後に、第三者による当センターの総合的評価を引用して、この報告を締めくくりたい。その評価とは、スタンフォード大学の委託を受けた現地視察調査団（Site Review Committee）によるものである。視察団は、インディアナ大学、オーバーリン大学、トロント大学（順不同）の日本学関係の教授3名からなり2005年11月14日から16日までの3日間をかけて調査した。視察団は横浜滞在中に、当センター専任教員の全クラスを見学し、教育内容の検討、専任教職員スタッフ全員への個別面接、全学生との懇談会、学生有志への聞き取り調査などを行い、その内容を後日、詳細な報告書としてまとめた。こうした第三者による現地視察は、過去にも数年おきに実施され、反省と改善の貴重な糧として以降の活動に生かされてきた。

今回の視察報告では、当センターが上級日本語の集中的教育機関として他に類を見ない重要な存在であると結論づけるとともに、その存在を外部

に向けて積極的にアピールすべきだという提言が添えられた。確かに、全北米あるいは世界中から優秀な学生を集め、質の高い教育を維持・促進するには、今のままでは広報活動不足の感が否めない。

この点に関して反省を迫られる一幕があった。2006年6月6日～7日に実施した卒業発表会場の一角を利用して、来賓を対象に当センター同窓生の著作紹介コーナーを設けたところ、強い関心を示したのは、むしろ学生たちのほうだったのである。錚々たる日本研究者が、自分の先輩に当たることを知らない学生もいたようで、やはり情報提供不足を実感した。

外部に向けた発信は、学生集めの宣伝活動に限ったことではない。当センターがこれまで長年にわたり培ってきた、学術・専門志向の上級日本語指導に関するノウハウを必要とする教育関係者は少なくないはずである。また、教育機関が地域で果たす役割についても再考する余地がある。受け入れた学生にできうる限りの教育を授けることが学校という場の主たる使命であるにせよ、それを取りまく一般市民に向けて、国際都市横浜という地域性に根ざした何らかの発信ができるのではないだろうか。

われわれ教職員一同は、卒業生、加盟大学関係者、支援諸団体・個人の後押しを受けながら、内部の教育をなお一層充実させるとともに、外部に向けた発信の努力もしていきたいと考えている。

(まつもと たかし／アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
言語課程主任)